
闇の端を歩くもの

凡 飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の端を歩くもの

【Nコード】

N7783W

【作者名】

凡 飛鳥

【あらすじ】

ある日、異世界に二人の少年が堕ちた、漆黒の髪に深い蒼がかかっており、短くも長い髪。

そして光り輝くような髪に僅かに紅い色がかかった美少年。

二人は、世界を救う勇者として、英雄として、崇められ、戦うことを頼まれる、一人は、戦い、救うことを誓い、一人は、生き、元の世界に戻ることを願う。

二人が紡ぎ出す運命の物語が、今、始まり、歯車は回り始める。

総合ユニーク400突破いたしました！これからもよろしくお願

します！

この小説はどなたでも感想をかけます、些細なことでも良いので感想や悪い点などお書きください。

闇の端を歩くもの 人物紹介（前書き）

この人物紹介はネタバレを含みます、人物の詳細などを忘れた時などに見通す程度で見るといいと思います。

闇の端を歩くもの 人物紹介

主人公

白爪 シロツメ 零下 レイカ 性別 男

光一に巻き込まれて、勇者召喚されたどこか不運な主人公、勇者の力を聖なる闇の神から授けられた、選ばれし者影ダレクム・サレインの夜の魂を継ぐ闇の勇者、魔法属性は闇、氷、嵐。微ツンデレ属性がたまに出る時があります。

蛭 ホタル 光一 コウイチ 性別 男

勇者召喚された、光の神の加護を受けた光の勇者、いつも無意識ハレムになるイケメン、たまに男にも言い寄られる、そういう女関係は全部零下が処理しています、魔法属性は光、炎、大地。お人よしな性格で、迷惑事にはいつも入ってしまう、零下も無理やり入れてくるほどの零下頼りさん。

ウイネル・ウエアネル 姫様 性別 女

二人を勇者召喚した、巫女、現在光一に思いを寄せている。魔法属性は水。

いつもの日々・・・かな？（前書き）

この作品はエグイ場面。少々下ネタが混合している部分があります
尚且つ主人公最強成分がありますのでご注意ください

いつもの日々・・・かな？

俺は白爪零下。性別は男だ、あだ名は「爪」なだけありなぜか厨二
ネームな『クロウ』だ。性格は零下の名に恥じぬまで冷たい時があ
るらしい自分では冷たくしている気は少しもないんだがな。んで隣
にいるこの美青年。蛍 光一。女はもちろん、男でも軽い恋をさせ
るイケメン振りには幼馴染の俺だからこそ普通にいられぬのだろうが
ーッ！？

『ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ』光一には聞こえないみたいだが俺には聞
こえた。時空が避けるような音がっておい！、、空間に、とても
黒い台風を上から見た画像のような大きな穴が開いてるってどうい
うことだよ、渦巻いてるどす黒い穴は俺には影響してないらしい、
光一はッ！？後ろを振り向き光一に声をかけようとしたその時。「
おいコウ！大じょ・・・つて。アアアアアアアアアアアアアアアッ」
俺はコウの直線状に立っていた、つまり。巻き添え喰らったという
ことだ

いつもの日々・・・かな？（後書き）

作者と零下のミニコーナー

???「あーやっちゃったなーおい巻き込むのはだめだったかなー」

零下「お前誰だ」

作者「作者の凡 飛鳥だよ、アスカとでも呼んでくれ」

零下「でなんで俺も巻き込ん「今回はここまででー」

零下「おいましてっちょ・・・」

遠く意識の中で（前書き）

巻き込んだのは面白くするためです、一人じゃつまらないからです。

遠退く意識の中で

「うわああああああ」

「アーツ」

言うまでもないだろうが零下だ、光一に巻き込まれて穴に入りました、意識が飛んだからこの後のことは知らん

(朦朧とした意識の中)

「どうしてこうなったのかねえ」

妖艶な美女は微笑む

「お前は誰だ、そしてここはどこだ、答える」

なぜか俺の手には漆黒のオーラを放つ禍々しい剣がありそれを彼女の首筋に突き付けている。

「まあ落ち着「この状況で誰が落ち着くか」

「わからんこともないがの、お前は親友に巻き込まれてしまったんだらうの」

「あいつが親友？ただの幼馴染で、さらにあいつのトラブルまで俺が沈めてやったのに感謝の一言もないあいつを親友？なおかつ女がらみのトラブルまで俺が解決したのにありがとうの

一言もないあいつが？幼馴染じゃないと確実に殴って埋めてる、なのに幼馴染、……なぜ？…….その後、愚痴一時間ほど…….というわけだ」

「なるほどのう、だが、幼馴染でどうしようもないということか」

「そうだ、ところでお前は……」

「おや、時間のようじゃの」

意識が元に戻る感覚、別れ際に俺は聞いた。

「最後に聞く、お前は誰だ」

「直にわかる、なんせこれで最後ではないのだからの」

「どういうことだ……」

意識は元に戻った、

遠退く意識の中で（後書き）

零下と光一は次で覚醒して力を手に入れます、覚醒と言っても力が目覚めるだけです

絶対零度の微笑み（前書き）

覚醒する、と書きましたが、今回は覚醒させてません、次話で覚醒させようと思います。

絶対零度の微笑み

「あべし！」

「ひでぶ！」

空に穴が開き、二人の人が落ちた、ちなみに前者が光一、後者が零下だ。

「えええつなに？なに？なにこれ？」

「…把握した。「何を！？」」

「ざわざわ…ざわ…ざわざわ…ざわ」

「実にテンプレすぎるが…」

「あなたたちが勇者ですね、どうかこの世界をお救い下さい」

二人を召還したらしき巫女は、二人を勇者と言い、この世界を救ってほしいと言った

「え？え？」

「ここは…」

「どういうこと！？」

「異世界だ…」

「…」

「…」

「な、何だつてー！」

光一は驚きで口をパクパクさせている。

一方零下はこの状況を察知し（というかあと少しでネットオタク入りかけだったから）ここが異世界だと理解していた。

「勇者様！この世界を救ってください！！」

確実にここにロリコンがいたら受けているだろう、たとえばうちの高校の2・5のロリコン先生とかは、絶対、そしてその巫女（？）さんは俺たちと同年に見える。

「まあ、ロリコンの範囲には、入るな」

「??？」

「ま、まあそうかもしれしれないな」

一人だけがわからない話をしている異世界人がいた、そう巫女には見えただろう。

「もう一度申し上げます、勇者様、この世界をお救いください！」

「・・・」

「・・・」

一瞬の沈黙、しかしもう一度巫女が言った

「お願いします!!」

「わかった！」

「だが断る！」

どちらもその声で即答したが、二人はまったく逆の答えを出していた。

「おい！何でだよ！何で救ってやらないんだよ！人が困ってんだぞ！」

「自分のことじゃないし、利益もない、お前は昔から知っているだろう、俺は自分に利益のあることしかしない、それに、これはこの世界のこと、元いた世界のことじゃない」

「だ、だけどつ!!」

「まずはそのお人よしの性格を直せ、大体、いつも勉強だけ互角程度以外はいつも俺に負けていたお前に何かできるのか？それに、俺と一緒に居たとして、二人でこの世界の命運を、背負って戦うのか？到底無理だ、たとえ、聖剣と勇者補正があっても難しい、もし勇者やるなら一人でやれ、俺は元の世界に戻る」

「くっ」

そのまま零下は巫女のほうへ歩いていく。

「そのチビ巫女、俺を元の世界に帰せ」

「な、ちっチビとは何ですか！」

「そんなことどうでもいいからさっさと元の世界に返せ」

「・・・それは」

「なんだ？」

「・・・それは、無理です」

「なぜだ！俺がこの世界にきたからか！？」

「違います、元の世界に戻るには・・・」

「なるほど、帰る方法はわかった」

「えっ！？」

「え？どうするんだ？零下」

「魔王だ」

「どういうこと？」

「元の世界に戻るには、魔王の、そう、魔王の魔造心臓が必要不可欠なんだ」

「そうです、魔王を倒さない限り、あなたたちお二人は、元の世界には返れないのです、」

「どういうことだ？」

「じゃあ、俺が説明しよう、魔王の魔造心臓は、大抵、無限の魔力と、強力な邪気で出来ている、だが、この国の総員の魔力と血を一人ずつ2デシリットル、いや、この巫女さんの血が、6デシリットルほどあればいけるだろう、それで儀式をすると、無限の魔力と莫大な聖気が生まれる、それを使えば、元の世界に戻れる、と言う事だろう」

「じゃあ零下も一緒に、魔王を倒そう！」

「すまないが、それは出来ない、お前が魔王を倒したら、すぐに察知してここにくる、それまではお前と顔を合わせることはきつとないだろうな」

そのまま零下は歩いていく。止めないと、また俺は、大切な人間をなくすのか、いまはもう、母も姉も死んだ、いやだ、幼馴染までもしかしたら失うかもしれない、しかし、そこに希望が見えた、零下からしても、計画がうまくいったと思っっているだろう。そこには、

メイドさんが、チェーンソーのような大剣を零下の目の前に右から

左へ突き出した。

グサツ　さすがメイドさんクオリティ、素人だとできもしないしできたとしてもグサツの効果音が発せられるのは零下の頭だっただろう。

「なぜ止める、勇者は光一にでもやらせとけ、俺は、どこかで平凡に暮らしとくさ」

「行かせるわけにはいきません」

「どうしてだ」

「姫様はああ見えてもかなりの魔力を消費しています、それに、かなり大きな次元の穴を作り出したのです。それは姫様の魔力のコントロールが昔から悪いのがいけないのですが、しかし、あなたも何かと、勇者の力が付いているのが、分かっているのでしょうか」

あ、巫女じゃなくて姫だったのか、そう零下は思った

「なんだ、やっぱり分かったのか、面白い、ならいいだろう」

「といたしますと?」

「俺も、魔王狩り、参加してやるよ」

零下は、にやりと、計画が上手くいったことを笑っていた。それはまさしく、ペテン師そのものだった

絶対零度の微笑み（後書き）

今回は長いのを出せました、毎週日曜に定期的投稿ができるように
したいと思います

EX:01 零下の過去(前書き)

零下の過去編です、零下は、どうして、元の世界に戻ろうとするのか、地味にシリアスな部分が多いです。

EX:01 零下の過去

『ああ、いつになれば、魔王が、この世界からいなくなり、人々の恐怖は消えるだろうか、闇は、いつ晴れるのだろうか、それは、勇者召喚しか、ないのだろうか、一人の運命を、私が、この世界のために、自分の自己満足のために、奪うしかないのだろうか、世界には、この世界を救うには、この方法しか、無いと言うのだろうか』

- 初代国王の英雄日記 - より

「初代国王は、今の奴等よりは、ましだった様だな、今は、異世界人頼りなど、かなり馬鹿げてることばかりする奴等なのに、そういえば、この召喚された勇者は、無事帰れたのだろうか、初代国王は、笑って亡くなったのだろうか、いや、今はしらなくてもいいか、それに、もうそろそろ時間だし、部屋に戻るか」
そういえば。

ふと零下は思った。

俺は、強いだろうか。

初代国王の、戦友として、親友として、魔王を倒した勇者のように、俺は、存在してもいいのだろうか。

いや、自分に問うても仕方が無いか。

俺は、存在していいから存在している。

あの時の様に、苦しんだ自分とは、もう違うのだから、

俺は、大金持ちの子供として生まれた、光一は、幼馴染で、光一の親も、大金持ちだった。

でも、家と家では、違いがあった。光一の家は、自由だった。

しかし、俺の家では、勉強、護身術、はたまた商業学など、一時の

休みも与えられず。ただただ、強勉をしていた、

光一の家は、いつもピクニックや、旅行に行っている、羨ましくない、と言えば嘘になるが、別に行きたいとは思わなかった、生まれつき、俺は運動神経がよかった、その対価に、俺はこの家庭になっただけだ、別に嫌なわけじゃないし、ちゃんと母と兄は俺を愛してくれている、幸せなんだ、そう思っていた、いや、言い聞かせてきた、兄は、抜け出して、遊んでくれた、母は、ちゃんと、愛情をくれた、それで十分じゃないか、そう思っていた、あの日が来るまでは、そう、勘違いしてた、こんなことが毎日続くのだと、思っていた、

7月24日

それがきたのは急だった、うちの家に、泥棒がのりこんだ、もちろんセキリユティーは、万全だった、しかし、壊されていた、察したところ、子供にはトラウマを植えつける手を使うらしい、なんて極悪非道だ、今思うとそう思う。

そして、俺は縛られた、別に、抵抗することもできた、しかし、俺は、抵抗しなかった、どうせ父が殺されて終わりだと、思い通りに行くと、思っていた、

母と父は、ロープで縛られ、父は、狂い、ほかの奴等は殺してもいい、だから、俺だけは助ける、そうすれば、金で何とかしてやると許せなかった、母を愛してなかったことに、自分だけという心に。

母は、「零下、あなただけは、せめて生きて」

最後の言葉だった、トラウマには、ならなかったけど、悲しみが生まれた、あんなにも大切にしてくれていた、母が、目の前で、殺された。

虐殺が終わると、犯人は自首した、俺に残ったのは、そのころの体と、心と、莫大な財産と、そして、そのころは風邪で休んでいた、執事の緑川さんだけだった。

緑川さんは、俺が一人になったことを知ると、すぐに駆けつけてくれた、一緒に泣いて、一緒に暮らすと言ってくれた、俺は、嬉しかった、俺に残ったのは絶望なんかじゃない、そう思えた、緑川さんは、家族のように、接してくれた、坊ちゃんと言うのは、いつまでたっても治らないけど、嬉しかった、今、元気にしてるだろうか、俺を、心配しているだろうか、きっと、心配しているだろう、帰った時は、きつい説教が待っているな、それもいいか。
必ず、俺は帰ってやる、どんな手も使っても、必ず、そう思う理由は、中学の時生まれた。

あいつは中学2年の時、ハーレムが完全覚醒した、そのおかげで、俺は、あいつの女関係、ゴタゴタ、はたまた不良とのけんかまで、やらされた、ありがとうの一言も言わないあいつに腹が立った、でも、俺は決めたから、お人よしはやめろ、少しは落ち着いたらどうだ、それしか言えなかった、あんなふうに虐殺はしない、力は、誰かを守るためにある、そう信じてたから、異世界召喚で、それは、変わったけれど、あいつらとバカして笑いあいたい、緑川さんと、また映画に行きたい、そう思ったから、俺は、今から、王に話を付けに行く。

生きて、帰るために。

EX:01 零下の過去（後書き）

短いですが、零下の過去を大雑把に書くところな感じですよ。

零下の冷たい部分には、実は仮面を被った部分があった、緑川さんには、素顔を見せてますが、他の人間には、あまり感情を出しません、もちろん例外はなく、光一にも。

勇者の力

「魔王狩り、やってやるよ」

「そうですね、ならば、姫様、お二人をあの空間に」

「ええ、そうでしたね」

「あの空間？」

テンプレだと、確実に異空間の中に色々あってそれを付けると、覚醒するのかなんとか。

案内されると、空間に穴が開く、そして。

「この空間から好きな物を一つ選んで付けてください」
見事にテンプレでした。

「うおおおおおスゲーお宝、どれくらいするんだろうなー」

「残念だが光一、持っていていけるのは一つだ、あと金の話やめろ」

「そうか…一つなのか、しょうがないなあ」

「さて、適当に漁るか」

「零下の趣味っておかしいから変なものにならないことをいわギャフレツ！」

零下の強力な飛び膝蹴りを顔面にお見舞いされた光一は言葉が変になっってしまった。

「さて、良いのあるかなつと」

何事も無いように漁る零下、光一はまだ倒れている。

「痛いな、お前の飛び膝蹴りはいつも痛いぞ」

「知るか、ん？」

「なんだ？お前のお眼鏡にかなう物でもあつたか？」

「…あつた」

「何…だと…？」

零下は漁りまくってついに取り出したそのアイテムは、黒い腕輪でした。

「そんな地味なのでいいの？」

「これでいい、いや、これがいい」

「ふーん、じゃあ俺は良いのを選ぶかな。」

光一の声を無視して零下は腕輪をはめる。

その瞬間、黒い光が輝き、零下を飲み込んだ、何が起きた、思うと

「お前は…あの時の」

目の前には、意識の狭間で見た、妖艶な美女が、小さな空間の端にもたれていた。

「ふう、あれを選んでもらえてよかったの、もしこの腕輪を選ばなかったら、この狭い空間で独りだったぞえ？」

「知るかそんなもので、ここはどこだ？」

「お主の意志の空間の小部屋、というところかの」

「俺の意志は家にもなってるのか、大体なんで俺の意志の中に他の奴がいるんだよ」

「それは我が主だからじゃ」

その言葉は、零下の耳に入ってから頭に届くまで、タイムラグが発生した。

「はい？」

「主は我じゃ」

「えええええっ!?!」

「ん？わかっていたのではないのか？」

「いや、わかってはいたんだがな、こつも当たるとは、ところでお前、名は？」

「……名は、無い」

「だろうな」

「人の用に、名が欲しかった、それは、かなわぬ願いじゃがな」

「なら、俺がお前の名を、つけてやるよ」

「ぬ？できるのか？」

「お前馬鹿か？人じゃないんじゃない、俺はお前、つまり、俺もっしの人格の俺だろう？つける権利はあるだろう」

「それもそうじゃな、では、どんな名なのだ？」

「ウイザレヌク・シャルロットでどうだ？」

「シャルロットか、家名までもらえるとはな、いい名だ」

その瞬間、空間は光り、壁はなくなつて、時の止まった夕焼けの公園へと変わった。

「どうやら、名を与えたことで、俺もお前も強くなつたようだな」

「そうじゃの、では腕輪の憑依から離れるか」

「好きにしる、俺の力の媒体にでもするんだらう？」

「ちがうの」

「アクセサリーにしるという事か？」

「そういうことになるのう、まあ目立たぬからいいじゃらう」

「そうだな、じゃあ、元の意識に戻ってもいいか？」

「うむ、わかつたぞえ」

そして意識はまた戻る

勇者の力（後書き）

シャルと零下が再開、力を手に入れました、媒体ではないと言いましたが、零下の体自体が媒体です、難しいですが、零下が生きていく限り零下は格段に強くなります、なんてチート。

闇の大陸へ

「おーい零下、起きてる？」

「起きてるけど？」

「色々巻き込まれたけどさ、これから一緒にがんばるっぜ」

「光一、今日中にここを出る、お前だけで頑張れよ」

「出るって何処に行くんだよ」

「どこにでも旅をする、お前が魔王を倒したらここに帰ってくる」

「でも明日は適合魔力属性検査だぞ？」

「そんなものギルドならどこでもできる」

「でも一緒に倒すって言ったじゃないか」

「計画だよ計画、わかるだろう？」

「嘘だったのか？」

「そうだ」

「くっ」

「このことはだれにも話すな、いいな。」

「好きにしろっ！！」

「ふう…すまない、光一、これしかないんだ」

「『サイレントムーブ
無音歩行』」

「いくか」

向かうところは王の部屋、この国の現代王はどんな手を使っても直せない病を患っている。

気づいていないだろうが、確実に呪いだ、直す代わりに交渉するか。

フロア5階王の部屋への道

「無音歩行解除っ」と

カツカツ、音が響く、そこにいた二人の扉番の兵士が音に気付き、戦闘の構えに入る。

「いい動きだ、だが」

「下級兵にしてはなっ！！」

一瞬で二人の兵士を気絶させた零下は部屋の中に入る。

「お前は…誰…だ…うっ」

「あんたの呪い、解きに来た」

「この事を知っているのか…ぐ」

「ああ、その呪いに対して喋れないようにする呪いと生命を蝕む呪いだ」

「解ける…のか…」

「やるだけやる、やり終わったらこの城から出る、あと上級装備と情報が欲しい」

「いい…だろう、…闇の勇者よ」

「なんだ、気付いてたのか、俺の事は喋らないでくれよ、時が来るまでは」

「いい…だろう」

「さあ、これで終わりだ、もう自由だな」

「感謝する」

「じゃあ聞こう、魔王領はどこにある」

「ここの国境を西に越えたところからだ、この国は聖域だから中級の魔物しか入れん」

「そうか、じゃあ装備は何処にある」

「武器倉庫だ、三階の階段近くにある、自由にとって行け」

「ああ、また会う日まで」

「ああ、頑張ってくれ、闇の勇者よ」
返事はなく、扉は閉められた。

「やはり気付いていたかメイドさん」

「ええ気付いていました、最初からね」

「そうか、で何の用？」

「あなたを武器倉庫まで案内します」

「ああ、助かる」

「あなたが考えているのは魔王領域へ入りスパイ活動というところでしょうか」

「さすがメイドさんクオリティ、よくわかったね」

「魔王の力はそこまで甘くありませんよ」

「死を覚悟しての行動だ、うまくいったら運がいい、それだけだ」

「そうですか、あなたが死ぬとは思いませんがね」

「確かに元の世界に戻るには生きていないといけないからな」

「付きました、お好きな装備を選んでください」

「あと、勇者の力で魔法創造は10個までです、自由に作れる魔法は十個、という意味ですね」

「わかった、ではこの大剣にするか」

そして零下は城を出た

赤鎧との戦い

どれだけ歩いただろう、背中に背負った大剣を持って。

「ここか、魔王領は」

門をくぐろうとすると、赤い鎧がその手に持つ槍を突き刺してきた

「どうした、見えた俺はそれだけか？」

零下が微笑む、無数の零下が、同時に

「生きるか死ぬか、選べお前は擬似的な命だが、死は怖いだろう」

赤い鎧は返答も無く、襲い掛かる、実態の零下に。

「やはり魔王製の生きてる鎧はすごいな、だが所詮その槍の力」
実態の零下は消えた、正しくは。

ドゴッ

鎧の裏に、移動し、その鎧を、闇で貫いた。

鎧は風化し、跡形もなく消えた、たった一つ落ちたのは赤い魔道槍のみが、落とされた。

「槍か、取りあえず取っておくか」

零下は魔王都へ足を踏み出す、元の世界へ戻るために、そして今を強く生きるために。

空を見上げて、誰にも伝わらない悲しみを、自分の中に閉まって。

赤鎧との戦い（後書き）

戦闘描写が難しかったから、適当にしました、申し訳ありません。

闇の扉

「おや、来客のようだね」

門をくぐると、ゴブリンや、オークが武器を持って襲いかかってきた。

「フツ盛大な歓迎だ」

モンスターどもは、たいてい棍棒かフレイルを扱うようだ。

「そうだ、作った魔法を使うか」

零下は、短詠唱の神話級闇魔法を使用する

魔法は、

下級 生活で使う程度、魔力が無くても乾いた木の枝に火をつける程度ならできる。

中級 攻撃に使える魔法、これを使えると魔道師にもなれる。

上級 強力な範囲魔法と拘束魔法、強化魔法をがこの部類に入る。

世界級 大陸を制した魔道師が使用したとされる大型範囲魔法、聖都（召喚してくれた腹立つ王国）には二人存在するらしい。

神話級 神が使用したとされる伝説の類の魔法、神に力を与えられても使えるものは少ない。

零下は、自分の属性が何か知っている。

光一とは正反対の、洞窟の闇が、人々を凍えさせ、そして命を吹き消す凍てつく闇の風、彼は光一とは違う、でも、何かに頼られる、

凍えそうでも、暗くても、命を吹き消す風でも、存在する意味がある、光が神々しく見えるには、反対の闇が必要だ、彼は光一を助けるためにここに来たのだから。

「『我は闇の鍵、我が魔力の鍵を持って、門の開錠を容認する、開け【ダークゲート漆黒の門】』」

詠唱が終わり、闇の門は、開いた、その瞬間、ゴブリンやオークは強大な重力に吸い込まれるように引き込まれていく。

「　　　　　凄いな、これほどの魔法を扱えるなんて」

可憐な少女の声が響いた。

魔王との…戦闘？

「凄いね、これほどの魔法を使えるなんて」

白髪黒眼の少女は微かに笑いながら零下に近づくと

「ハッ！」

少女は一瞬の動作で腰にあった短剣を振り下ろす。

しかし零下には当たらず地面に突き刺さる

「遅いつ」

零下は嵐と氷の神話級自作魔法を使用する

「『貫く冷徹な雨、命の奥まで凍りつかせよ、我が問いに答え、空より落ちろ！』【アイシクルレイン】『」

氷の刃が空を埋めるほどの数で降り注ぐ、周りにいた小屋は刃に貫かれ、凍っていった。

「なかなかだねでも、【フレイムバリア】」

少女の炎で、アイシクルレインは溶けてなくなる

「甘いッ【ウインドカッター】！」

風が刃となり、少女に近づくと。

「わあ、すごい速さだ、並みの術師にはできない速さだ、でも【滅びの空間】」

黒い空間が少女を中心に広がって行く、広がる空間に触れたものは急激な速度で老化していき、風の刃は消えた

「神話級の制約解除無しで時空魔法かよ、と言つことはあんた魔王だな」

「ほらほら死んじゃうよー、いいの?」

「とんでもないことをさらつと言つな、解決策がないとでも?」

「やれるならやってみてよ」

「いいだろう『我が望むは再生の時、命は芽生え、そして死んでゆく、世界の理を力とし、時は巡る【再生の空間】』」

零下からは緑の空間が現れ、地面には草が芽生え、また枯れていく、そして滅びの空間とぶつかり、消滅した。

「闇風流魔剣技【風龍斬波】ウインドドラゴンカッター」

零下は自らしか使えない闇風流の魔剣技を使用する、零下が切り裂いた場所からはウインドカッターを纏った透き通った緑の龍が飛んで行き、少女に近づく。

「うわあっ」

少女は攻撃をもろに喰らい、空に舞い上がる、そして地面にぶつかるといふ瞬間

スタツ

零下が少女を綺麗に受け止めた。

「あわわわわわわわわわわわわわわわ」

少女は顔を赤くしている、それもしようがない、なぜなら魔王は女性で、今、零下はその少女を俗に言うお姫様抱っこなるものをして

いるのだから。

「おいしょっと」

零下は少女を降ろす、少女はまだ顔を赤くしているが、気にせず話を進める

「じゃあこれで試験は終わりかな？」

「うづうづん、しししし試験はこれでおお終わりだよ」

相変わらず落ち着かない少女にため息をつき、零下は空を見上げる、空は黒に近い紫をしており、月が二つ薄気味悪く笑って、口から血を流していた。

一章完

魔王が意外に変な人でした 其の一

魔王城で住み込みの騎士になった零下だ、実は今…

「すーすーすー」

宿舍の部屋が足りないからと言われ、魔王の部屋で住むことになったのだ。

「宿舍足りないなら自分で木材集めて簡易式ベッドでも作って寝るのに魔王が私の所に来てよ！って言いやがって、本当迷惑だな」

「寝床貰ってるのに迷惑と言っな！！」

「起きてたのか」

少女（魔王）は、豪華なベッドから飛び出て零下に指を指す。

「だって君の実力テストがあるからね」

何故か、昨晚魔王と戦ったのに実力テストがあると少女は言う。

「勘弁してくれ、昨晚戦ったばかりじゃないか」

「皆に君の力を見せ付けるためだよ、それに僕と戦ったことが知られたら、皆パニックになっちゃうよ」

「そうだな、それでどんなテストだ？」

「簡単に言うと、僕が君を異空間に飛ばすから、そこで黒い鍵と扉の欠片を集めてくれればいいよ」

「欠片っていくつあるんだ？」

「1000個程度かな？全然程度じゃないっ！！」

「君の魔法を使えば楽勝でしょ？」

そう、零下の能力は闇、闇を広げて引き寄せれば簡単だ。

「それもそうだが、モンスター達が出てきて邪魔するよんな気がし

てしょうがない」

「チッ」

「舌打ちした！こいつ舌打ちしやがった！」

「何のこと？」

「はあ、なんでもない、それであとどれくらいでそれを始めるんだ？」

「昼食食べ終わったらだよ」

「朝食までの時間は？」

「三時間後」

「今の時間は？」

「多分3：30位じゃない？」

「じゃあ時間があるな、あれもできる」

「あああああれて何！？」

何故か魔王が赤面で後ずさりする

「違う！そんな目で見るな！断じてお前が想像したことなんかしないししたくもないっ！！」

「チッ」

「なんで舌打ちしたのか理解できない」

「五月蠅い！どうせ零下君は女心を理解できないんだーっ！」

「理解しないししたくもないっ！」

その声がまだ皆が寝ている城に響きながら日は昇り始めた。

EX : 1 王国の希望

『明日生きているかも分からないこの世界で、裕福に暮らしている貴族達は平民を豚同然に扱い、虐殺する、この世界は 狂つてる』

第一国王英雄日記1頁目一行

朝起きると、なにやら騒がしかった、見習い兵士に話を聞くと。

「零下様が何処かに消えてしまったのデス！」

昨晚の話は本当だったのか、しかし何処に言ったんだ、それは今の俺には分からなかった。

俺は、昨日聞いた話のとおり地下一階に行った。

「来たか、勇者よ」

「はい、国王様」

「今日から五ヶ月で強くなる訓練をして貰う訳だが、一人で訓練するより二人で教えあい、競い合った方が成長できると思う」

その点は間違つてはいない、だが今零下はいない、誰と一緒に訓練するか、勉強以外と運動神経以外できない天然の俺でも分かる。それは・・・

「国王の私の娘、ウイネル・ウエアネルと一緒に訓練をしてもらうことにした」

ウエアネルさんが顔を赤に染めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7783w/>

闇の端を歩くもの

2011年12月16日23時54分発行